

今井源衛・春秋会

我身にたどる姫君 5



桜楓社

我身にたどる姫君
5

今井源衛・春秋会

今井 源衛 (いまい げんえ)

大正8年生。昭和22年東京大学卒。清泉女子大学を経て、昭和31年より九州大学文学部勤務。昭和57年定年退官。現在、梅光女学院大学教授。九州大学名誉教授。文学博士。

＜主要著書＞ 源氏物語の研究(未来社)・紫式部(吉川弘文館、人物叢書)・花山院の生涯(桜楓社)・王朝文学の研究(角川書店)・紫林照徑(角川書店)・源氏物語6冊(小学館、共著)・祐倫光源氏一部歌(桜楓社)・国文学やぶにらみ(和泉書院)など。

我身にたどる姫君 5

定価 一二〇〇円

印刷 昭和五八年八月一五日

発行 昭和五八年八月二五日

著者 ©今井源衛・春秋会

発行者 今井肇

発行所 株式会社 桜楓社

101 東京都千代田区猿樂町二一八一三

電話 〇三(二九五)八七七一

振替東京 六一八〇二〇

印刷所 共信社印刷所

製本所 大日製本印刷(株)

0393-830816-0723 Printed in Japan

遺本には充分注意しておりますが落丁・乱丁などの折には小社あるいはお買い求めの書店でお待ちしております。

我身にたどる姫君 卷六

目次

卷六

第一段	五月雨の夜	右大将圖、前斎宮圖の邸内を垣間見する。	11
第二段	怪しき風	前斎宮の人々と兵衛佐の来訪。	16
第三段	もの羨み	兵衛佐、妹の小宰相に贈物をする。	25
第四段	古りたる人	大納言の尼、女帝圖に拝謁する。	32
第五段	大淀の松	前斎宮、女帝に消息を送る。	37
第六段	もののけ	前斎宮の狂態。	42
第七段	しみ深き扇	格子のものと扇騒動。	45
第八段	物の具運び	大納言の尼の引越し騒ぎ。	60
第九段	田舎人	大貳の君、参内、事情を訴え出る。	67
第10段	わたのはらから	三位の君、女帝に報告。	75
第二段	青衣の女	前斎宮悪夢を見る。新大夫巫女を訪れ、呪詛発覚。	80

..... 5

第三段	日のくま川	前齋宮、御乱行の果てに源中将と親しくなる。	84
第三段	ものまねび	女帝、女房をたしなめ、公文書の誤りを正す。	89
第四段	近習女房	女帝、近習女房四人にお守り箱と扇とを賜わる。	95
第五段	変化の人	三条院四、女帝の学才を賞讃。	104
第六段	御はからい	女帝、前齋宮に庄園を分ける。大貳の君退散。	109
第七段	御遺言	女帝死期を覚り、近習女房に遺言。	118
第八段	なりゆくさまごま	前齋宮の女房たちのその後の動静。	122
第九段	八十路の月	遠仲と長源のこと。	131
第三段	空の花々	女帝と近習女房、兜率天に上り、歌会を催す。	137

主要登場人物各巻別呼称一覧	146
---------------	-----

凡例

- 一 各巻は、それぞれ適当に章段を区切り、現代語訳・原文・語釈の順に配した。
- 二 章段の小見出しは、仮りに付けたもので、原文にはない。
- 三 現代語訳は、本作品として初めてのものであり、一般読者の便宜のため、極力読みやすく分かりやすいことを旨とした。そのため、省略された主語・述語を補い、必要に応じて説明のための語句を補足した。

四 本文の整定については、特に留意し、左の要領によってそれを行った。

- 1 底本には尊経閣文庫蔵本を用いた。
- 2 底本の誤りは金子武雄氏蔵本（九条家旧蔵本）・宮内庁書陵部本に拠って訂正し、また底本・校合本ともに誤りと判断される箇所は、適宜改訂本文を立てた。共に右の箇所には*印を付し、「語釈」に注を加えた。
- 3 表記については、読解の便と原形への復元を考慮し、以下のようにした。
 - a 本文に濁点・句読点を付し、段落を設けた。
 - b 会話文には「」を付し、話者を（ ）で補記した。
 - c 和歌の肩は、底本では三四字下げで、歌末は次の地の文に続けられているが、これ

を改め、歌に続く地の文の頭は行を改めた。また（ ）内に詠者を注し、和歌の全巻通し番号を付した。

d 底本の仮名に漢字をあてた場合には、「今の帝」の如くに、底本の仮名をふり仮名として残した。

e 底本に用いられている漢字のうち、補助動詞(給ふ・聞ゆ・侍りなど)・助動詞(也など)・助詞(物から・斗など)は、ひらがなに改めた。また、当字(木丁・大はん所など)、当字ではないが意義に誤解の生じやすいもの(衰れ・の給ふなど)、及びひらがな書きが通常であるもの(又・中々・猶など)は、原則としてひらがなに改めた。その場合、底本の漢字は、「たまふ」^給「几帳」^{本丁}「また」の如くに傍記して残した。

f 反復記号(躍り字)のうち漢字の反復である「々」のみは底本のままとしたが、「ム」
「く」は同文字を繰り返し、底本の形を「ことども」「らうらうじく」の如くに傍記した。

g 底本にない送り仮名や補読を加えた場合には、「明け暮れ」の如く、その文字に・を付した。

h 仮名遣いは「歴史的かなづかい」を用い、底本の仮名遣いがそれと異なる場合は、「ゆゑ」「おのづから」の如く、底本の仮名遣いを傍記した。

i dに従って、底本のかなに漢字をあて、底本本文が「ふりがな」となっている部分の仮名遣いは底本のままとし、「参り」の如くに、歴史的かなづかいを（ ）で補記

した。反復記号の場合も「心」の如く、底本のままをふりがなとした。

j 底本における「む」「ん」の使用は混用されているが、統一せず底本のままとした。

k 字音語は、鎌倉期の作品ということも考慮して、底本のままとした。「承香殿」を「そかうてん」「しよきやう殿」と表記するときも統一しない。

l 底本の漢字で、必要と思われるものには（へ）に入れてふりがなを付した。

m 以上、従って、（へ）の部分を除き、ふりがな・傍記のある部分はそれをたどり、本文改訂箇所を*で注意すれば、一応は底本文の姿に復元できることになる。

n 尊経閣本・金子本・書陵部本の間における異同は、最終巻に一括して掲げる。

五 語釈は簡潔を旨とし、引歌引詩の出典考証や、先行物語の影響関係の指摘などに重きを置いた。

六 右の場合、引歌引詩の典拠と見られるものは、「……に拠る」と注し、その典拠である確実性が比較的乏しいものについては、「参考」として掲げた。

七 原文の文章法・語法・語義などは、特殊なものについては注記したが、多くは「現代語訳」によって理解できると見て、語釈としては特記していない。「現代語訳」と「語釈」との重複を避けたのである。

八 参照すべき他の箇所の指摘に当っては、巻序はローマ数字、段序と頁数とは漢数字、行数は洋数字をそれぞれ用いた。たとえば、

Ⅳ八段二五頁8行

の如くである。また必要に応じて、段序のみによって示し、頁・行を省いたものも多い。

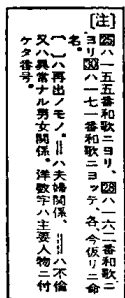
九 「鑑賞」欄は特別に設けず、必要ある場合には、「語釈」中に加えた。

二〇 巻頭の「梗概」・「目次」および「語釈」中、登場人物に付した番号は、主要人物を対象に、ほぼ登場順に付けたものである。系図を参照されたい。

二 登場人物の呼称の中には、今般新しく命名したものも含まれている。

二 登場人物索引・引歌引詩一覧・内裏図その他付図・用語索引・年立その他は、最終巻に収載の予定である。

卷
六



一 五月雨の夜

新しい御代になってお代りになった前斎宮は、お育て申し上げなされた御母御
匣殿もなくなり、その妹の大納言の君と呼ばれた人が尼となって修行していたも
との生家にお帰りになった。「御父上の嵯峨の院のもとにおいでになるのだろうか
か」など人もお噂申し上げたけれど、院は「まだ一度も見たことのない人だか
ら、それでよからう。こんな世間離れた山里住まいの中に、見も知らぬ人が同
居するのもぐあいが悪い」などと、おいやそうなお気持でいらしたので、それ以
上誰も申し上げるはずもない。それでも勅旨田など一箇所ぐらいは大納言の君に
とつても何かと不自由であらうというので分けてさし上げなされたので、こうし
て田舎家に住んでいらっしゃるが、右大将は、あの雲の上人への恋がああして叶
わぬのは無理もないとはいふものの、こんな有様で日を過ごしているつらい思い
の数々の癒える日とてもない慰めにも、同じ姉妹ゆかりで似通っていることもあるうか

と、折から五月雨の軒の雨だれの音にまぎれてかいまみをなさった。

実のところ、人目にはどれほどかお気の毒な御有様であろうとお思ひになつていたのだったが、寝殿の南正面に灯があかあかと見えて、何の屈託もなさそうにはなやかな女の人たちの声が聞こえるので、すこし意外な気がしたけれど、氣をつけて裏から押さえてふさごうとする人もいない古びた格子はひどく隙間だらけで、遮る物はなにひとつない。こんな多勢の人がいるにはいるが、ただ、これといった事も無さそうに見える若女房が四、五人ばかり、どうしたことか身分の上下の別もなく、ふざけ合つてまっかに上氣しているが、主人と見受けられる人もいない。障子を一枚へだてて、こちらあかあかと輝く灯のもとに、部屋のはつらいの有様も、田舎家とはいえやはり一目瞭然立派なので、じつと目をこらして御覧になると、同じ年格好の若女房が二人、どちらかが主人なのだろうけれど、二人ともとてもそうとは思えない。氣候も暑さに向かっている折なのに、薄衣を頭から引つかぶっているが、その中で息もしていないのかと思われるほどいつまでも、相手の首に抱きついて臥せている。といっても、どういうわけか、

泣き声を立てたり、はなをかんたりなどもする。つらく悲しい事でもあるのかと思つて見ていると、またたちまち我慢できなくなったように笑い出す。右大将は、がてんがいかない思ひをなさる。着物の下も静かではなくて、どうするつもりか何やらややこしくてきちがいじみているので、風変りで好奇心を唆るところもあるけれど、あいにく大将は思慮深くて図々しいことがらは好きでないお人なので、おしまいまでは見届けることさえもなさらず出ておしまいになったが、女たちがそれに気づかなかつたとはさてさて残念なことだ。もし気がついていたら、さぞかしとり縋つてあとをお慕い申ししたことだろうに。

【原文】

新しき御代に替⁽¹⁾らせたまひにし齋宮⁽²⁾、育⁽³⁾みたてまつらせたまひし御匣殿⁽⁴⁾も亡⁽⁵⁾せて、そ
のおととの大納言の君⁽⁶⁾といひしが、尼⁽⁷⁾にて行⁽⁸⁾ひゐたる古里⁽⁹⁾にぞ、帰⁽¹⁰⁾りたまへる。「嵯峨⁽¹¹⁾
の院にや」など、人もきこえさせしかど、「すべて、いまだ見ぬ人なれば、あへなむ。世⁽¹²⁾
離れたる山里⁽¹³⁾住⁽¹⁴⁾みに、見も知らぬ人の混⁽¹⁵⁾らんもあいなし」など、厭⁽¹⁶⁾はしげにおぼしめした
りしかば、誰⁽¹⁷⁾かはなほもきこえん。さすがに勅旨⁽¹⁸⁾など一つばかりは、大納言の君のためも

所せからむとて、分ちたてまつらせたまへれば、忍ぶ草のなかに住みたまふを、右大将は、雲(8)の上の、さこそおよばぬ、ことわりと聞えながら、ありふるままの心(9)尽しを思ひさまさぬ慰めにも、紫の色や通ふとにや、五月雨の軒のしづくに紛れて、垣間見したまひけり。

さるは、人目にいかばかり心苦しからむとおぼしつるを、南面に火いとあかく見えて、誇りかにはなやかなる人の声ども聞ゆるに、少し思ひのほかなれど、わざとおし塞ぐ人もなき古き格子は、隙のみ多ければ、何にか障らん。かく人がちなる方は、ただそことも見えぬ若人四五人ばかり、何といふにか、上下となく戯れかかやけど、君と見ゆる人もなし。障子一つを隔てて、これも火いとあかきにぞ、設ひなどさすがに著ければ、目をつけて見たまふに、同じ程なるに若き人二人、いづれか主ならん、さしもあるべくもあらず。物暑れてなり行く頃を、薄き衣を引き被きたるうちに、限りもなく、息もせざらむと見ゆる程に、首を抱きてぞ臥したる。さるは、何といふにか、うち泣き、鼻うちかみなどもす。あはれに悲しきことやあらんと見るほどもなく、また堪へ難げに笑ふ。心得ず見たまふ。衣の下も静かならず、何とするにか、むつかしうものぐるほしげなるに、様変り、ゆかしきかたも混れど、あやにくに心深くなれなれしき筋を好みたまはぬ人は、見たにもはてず出でたまひぬるを、知らぬこそ口惜しけれ。いかばかり取りも付きて慕ひきこ